South Pacific Study Vol. 16, No. 2, 1996

沖永良部島における退職者の生活史

田　島　康　弘[1)]

Life History of Retired People in Okinoerabu-island

Yasuhiro TAJIMA [1)]

Abstract

This study surveys the life history of people who returned to their home island, Okinoerabu-island, after retirement. We questionnaired forty-nine returned residents, concerning birth year, their leaving home, working life in cities, returning home and present life in their home island, and received thirty-three answers. This study was conducted on the basis of these answers. The respondents left home in their teens, and most of them worked in the Hanshin district, perticularly Kobe city, and most of these worked in big factories in the sea-side manufacturing zone. Some of them settled but others moved on to Tokyo. They returned all home after retirement in the 1980s' when they were 55-64 years old. There were a variety of reasons why they returned. However, the biggest reason was to take care of their parents. It is necessary to understand both islanders and city dwellers in this kind of area study. The respondents lived away from their sons and daughters. On the other hand, They participated in the voluntary associations when they lived in the urban areas which kept contact with the home island.

Key words: Life history, Okinoerabu-island, Emigration, Returning home, Area study

研究目的

本研究は鹿児島県大島郡沖永良部島の帰郷者を対象として，彼等の移住を中心に展開された生活史を把握しようとしたものである。

農山漁村や離島など，いわゆる過疎地帯に住む人々の多くが，生活維持のため，自らの生れ故郷を離れて都市部で働くことを余儀なくされ故郷が荒廃するという，現代社会における過疎問題が指摘されて久しい。しかしながら，従来の研究視角では，挙家離村や村の崩壊など過疎地域のきびしい現実が問われることがあっても，そこに住んでいた人々の生活そのものを追うということは，それほど多くはなかった。また，人々の生活を「追っている」場合でも，彼等の都会での生活がどうなのかというところに留まっていることが多かったように思う。

たしかに，都市部へ移動した人々の多くは移住先の都市部に生活の拠点を築き，中には先祖代々の墓まで移して都会人になってしまう人も少なくなく，こうした人々に関す

1）鹿児島市郡元１丁目20－６　鹿児島大学教育学部
Department of Geography, Faculty of Education, Kagoshima University, 1-20-6, Korimoto, Kagoshima 890, Japan

る研究も一方では大切であるが，他方，少なからぬ人々が，主に定年退職後，都会での生活をふり返って，その後の人生を生れ故郷に戻って生活することを決め，実行しているのである。本研究はこの点に注目したものであり，高度成長時代をすぎて，「安定成長」期といわれる時期もかなりたった現在の段階で，こうした現象をどのように捉え，どのように日本の社会の中に位置づけるかを問題にしている。この問題は，今後の日本の社会のあり方，とくにその地域的・空間的なあり方を考えていく上でも，重要な論点の1つとなるように思う。

また，本研究では何よりも，帰郷者の生活史の展開の実態の把握を重視した。帰郷者を主体としたこうした現象の把握そのものが，従来はあまりなされて来なかったと思われるからである。

研究対象地域として沖永良部島を選んだのは，同島出身者は奄美の中でも一定の特色のある移住パターンを持っていると考えたからである。すなわち，彼等の移住先の中心は神戸であり，神戸の中でも臨海部の大企業で就業する者が比較的多かったのである。奄美の他地域の出身者と比較すると，こうした傾向は独特であり，一定の特色を持つ集団の追究は，他の特色を持った集団と比較する場合に一つの視点を提供することが考えられる。また，筆者の奄美の人々の移住研究の中で，同島の人々の把握が手薄であったことも，今回ここを選んだ理由の1つであったこともつけ加えておきたい。

帰郷者の移住生活を把えるということは，彼等が生きてきた過程すなわち人生そのものを対象とすることになる。地理学や地誌＝地域研究で地域をトータルに把握するという場合，地域で生れ育った人々のこうした生活や人生全体を視野に入れて，また，場合によっては中心に捉えて地域の把握を行うという方法は考えられないものだろうか。本研究は，こうした考えに対する1つの試みでもある。

他方，人々の生きてきた過程や人生は，当然，その時代の特色を反映することになるであろうし，また，沖永良部島で生れ育ったという地域性をも反映するであろう。このことは，逆な言い方をすれば，彼等の人生を通して，現代という時代の特色や沖永良部島という地域社会の特色を浮きぼりにすることもできる，ということかも知れない。

本来，人々の生活や人生と時代や地域とは不可分なものであり，時代や地域の中での人間を把える視点が，地理学や地誌＝地域研究の中にもっと取り入れられてよいのではないかと思う。本研究は，こうした視点をも考慮に入れて行なったつもりである。

研究対象地域の沖永良部島は，北緯27°23′，東経128°37′に位置し，94.5㎢の面積をもつ隆起さんご礁の島で，奄美群島の中では奄美大島，徳之島に次いで大きい。和泊町と知名町の2町からなる農業中心の島である。

研究の方法

帰郷者の生活史の実態を把えるためには，帰郷者自身に面会し，直接話を聞くことが必要であるが，このような研究方法に相当する内容について，ここでは次の3つに分けて述べたい。すなわち，第1は調査対象者である帰郷者をどのように選定したかということであり，第2は，面接の際にどのような内容のことを聞いたのかということであり，第3は，以上の2つをふまえて，実際にどのように調査を行なったのかということである。

1）帰郷者の選定

沖永良部島に退職して帰郷した者がどのくらいいるのか。調査を行うに値する程度にはいることは諸般の事情から推測していたが，実際にはどの程度なのか，また，その人達をどのようにして探し出すのか，まず最初にはっきりさせなければならないのはこの問題である。

幸い，筆者と同じ学部に勤務し，同島出身でもあって同島に詳しい島田教授に，このことを尋ねた。氏は，1）氏の知人に会って確かめること，2）ついで和泊，知名両町の教育委員会に問いあわせた。

具体的には，和泊町では生涯教育課の永吉敏人氏，知名町では社会教育課の上村健仁氏の名前があがった。

その後，筆者との交渉で，知名町に対しては文書での依頼を行った。

のちに確かめたところによると，教育委員会による退職帰郷者の把握の方法は，

(1) 役場内でのこの件に関して詳しい人からのききとり。

(2)「農業技術員連絡協議会」が所有する「Uターン者名簿」の中からの退職者の抜粋。

(3) 各集落に居住する役場職員に対する個別のききとり調査。

などの結果，抽出されたものであった。

結果として抽出された人数は，和泊町が25人，知名町は24人であったが，これは，以上の方法によって把握し得た限りでの人数であり，実際にはもっといるであろうことは両教育委員会からも直接言われ，より詳しくは和泊町に21，知名町にも21ある各集落の区長に聞かないとわからないということであった。しかし，(1) 計42の各区長氏に問い合わせを行うことは，それ自体が1つの調査になってしまうこと，(2) 既に判明した約50名の被調査者の数で，調査対象者数としてはほぼ適当であること，により，各区長氏に対する調査は今回は行わなかった。

2）調査内容の決定

調査内容については，結果の部分でより詳細な内容が明らかとなるが，ここでもその大要について述べておきたい。

帰郷者の生活史について，筆者は次の6つの大項目で捉えることを試みた。すなわち，(1) 誕生，(2) おいたち，(3) 出郷，(4) 出郷地での生活，(5) 帰郷，(6) 現在の生活の6つである。これらの各項目のさらに細かい内容については，結果の部分で述べることにし，ここでは省略する。以上の他，(7) 出郷先および故郷の良い点と悪い点などの評価，(8) 子供など家族との生活分離の状況，(9) 出郷先における郷友会とのかかわりの3点を追加項目として設定している。帰郷者の生活史に関連する重要な事項と考えたからである。

調査の大まかな内容は以上であるが，この他，調査の際に留意した点がいくつかあるのでこれについて述べておきたい。

(1) 方言で答えてくれた場合はなるべくそれを生かすこと。

(2) 事実を捉えることは最も基本だが，それだけでは豊かにならないので感情や考え方など精神面の把握にも努めること。ただしこれをどの程度まで行うかはむずかしい。

(3) その人の人生にとって大きな事件や出来事を把えるように努めること。

(4) 私達の調査それ自身に関する意見があれば，これについても積極的に聞くこと。
などである。

3） 現地調査の実施

現地調査は，1995年7月19日から26日まで，教育学部社会科の学生8名[2]の協力を得て，沖永良部島で実施した。20日の午後，和泊町教育委員会，21日の午前，知名町の教育委員会で，それぞれ調査対象である帰郷者のリストを受けとることができた。先述のように和泊町25名（うち女性1名），知名町24名（うち女性1名），計49名（うち女性2名）分である。

調査を行なう我々の方は，学生2人で1つの組をつくり，筆者を含めて5つの組で分担してききとり調査に当った。21日の午後は和泊町の各集落，22日には台風で風が強くほとんど行動できなかったが，23日に知名町の各集落を分担してまわってききとり調査を行ない，24日にも，両町の残っている部分の調査を行なった[3]。

留守で連絡がとれない場合や家を見つけられない場合などがあり，また，調査への協力を拒否された場合も3件あった。被調査者の都合で回答の郵送をお願いした場合も10件あったが，その後実際に郵送されたのは和泊町2件，知名町6件，計8件で，郵送の予定が実施されないこともあった[4]。

以上の結果，現地で回収し得た調査票数は和泊町が15，知名町10であり，後に郵送されてきた分を合わせると，和泊町17，知名町16，合計33の調査票を回収することができた。これは調査対象者総数49の67.3％に相当する。

ここで，被調査者の集落別分布をみておくと，両町の集落数は和泊町が21，知名町21で合わせると42集落であり，被調査者が33なので平均すると1集落1人以下となる。しかし，多い集落では5人（国頭），4人（芦清良）の被調査者がいるところもあれば，他方0の集落も少なくなく，集落によりアンバランスがあって一様ではないことも指摘しておきたい。

調査結果

調査の内容の大要については，方法の部分で既に述べたが，調査の結果について，ここでは 1．誕生と生いたち，2．出郷と出郷先での生活，3．帰郷と現在の生活の3つに大きく分けて整理し，述べることにする。

1．誕生と生いたち

1）被調査者の年齢

まず，調査時点における被調査者の年齢をみると，60才から79才までの間にはほとんどの者が入っており，とくに65才から74才までの間に全体の64％の者が入っていて，60代後半から70代前半の者が最も多い（第1－1表）。彼らの平均年齢は68.9才である。69年前ということは，彼等の誕生が1926年ということになり，物心のついた頃は戦争の真際中であるという時代背景を想起することができる。

2）誕生地

調査の結果は，被調査者のすべてが現住集落で誕生したわけではないことを示した。

第１－１表　被調査者の年齢

年　齢	和泊（町人口）	知名（町人口）	計（島人口）	割合（%）
85才以上	(189)	1 (141)	1 (330)	3.0
80－84	(264)	(217)	(481)	
75－79	1 (391)	3 (349)	4 (740)	12.1
70－74	6 (449)	3 (388)	9 (837)	27.3
65－69	7 (524)	5 (532)	12 (1056)	36.4
60－64	3 (607)	3 (570)	6 (1177)	18.2
55－59	(624)	(524)	(1148)	
50－54	(462)	(433)	(895)	
45－49	(396)	1 (353)	1 (749)	3.0
40－44	(505)	(519)	(1024)	
計	17	16	33	100.0

注）（　）内の町別・年齢階級別人口は参考までに付記した。
数字は1990年，国勢調査による。

第１－２表　非現住集落誕生者の誕生地

	現住集落	誕　生　地
和泊町	手々知名	大阪
	〃	和泊町和泊
知名町	竿　津	神戸
	芦 清 良	中国東北部（大連）
	〃	知名町下城

第１－３表　続柄

	和泊	知名	計	割合（%）
長　男	5	4	9	42.9
2・3男[1]	5	5	10	47.6
女　子	1	1	2	9.5
小　計	11	10	21	100.0
不　明	6	6	12	
計	17	16	33	

注１）４男以下も含む。

すなわち33名中28名は現住集落で誕生しているが残りの５名中２名は町内の他集落で誕生しており，他の３名は親が当時生活していた阪神および中国東北部で誕生し，子供の頃，親の故郷に移って生活した者であった。（第１－２表）。

３）続柄

第１－３表は不明が多く限界もあるが，この表からわかることの第１は，長男であるが故に帰郷するという傾向がある中で，２，３男の帰郷もかなり見られるということであろう。また，長男の帰郷も多いということは，長男でも出郷する者が多いことを前提としており，このことをもこの表は示していると言えよう。

4）家の職業

家または親の職業では農業が多く，農家兼業を含めると約3分の2を占めるが，この他では教員や警察官が目立っている（第1－4表）。

5）家業の状況

家業の状況では「余裕があった」という世帯も存在したが，約半数は貧困であったと答えている（第1－5表）。

6）子供の頃の思い出

子供時代の様子をつかむために，「子供の頃のことで思い出すこと」について尋ねた。全体を4つにまとめて整理したが，1．は主に父母の労働のきびしさを，2．は戦時的な時代背景を，3．は転職や移動の多さを主に示していると言えよう（第1－6表）。

7）家族等の出郷状況

被調査者が子供であった当時，既に家族の中で出郷者がいたという者が半数近くあり，親戚にはいたという者を含めると8割近くに達していて，一般に出郷者が多かったことが示唆されている（第1－7表）。

以上を全体としてみると，戦時という時代を背景に，離島農村の貧困さの中で，出郷を余儀なくされていたという当時の被調査者達をとりまいていた状況が浮かび上ってくる。離島という条件は出郷の状況をとりわけきびしいものにしたであろう。

第1－4表　家の職業

職　　業	和泊	知名	計	割合（%）
農　　業	10	11	21	63.6
農家兼業[1]	4		4	12.1
教　　員	1	3	4	12.1
警察署→農業[2]	1	1	2	6.1
税務署→農業	1		1	3.0
医　　者		1	1	3.0
計	17	16	33	100.0

注1）農業を行う他方で出稼ぎ，農具（縄物）製造，船員，漁業を行っていたものである。
2）警察署勤務から農業に変わったことを示す。

第1－5表　家業の状況

状　　況	和泊	知名	計	割合（%）
貧乏，貧困，苦しかった，最低の生活，など	8	5	13	48.1
ふつう，中流程度	4	6	10	37.0
余裕あり，ある程度豊か，良好，退職金でゆとり，など	3	1	4	14.8
小　　計	15	12	27	100.0
不　　明	2	4	6	
計	17	16	33	

第１－６表　子供の頃の思い出

１）家庭のこと，とくに親の手伝いに関するもの（７）

①　農作業の手伝い（３人）
②　父母と死別（２人）
③　両親の早朝から夕方までの労働
④　食料増産

２）戦時的時代背景に関するもの（６）

⑤　軍事教練（２人）
⑥　戦時中で勉強ができなかったこと（２人）
⑦　海軍志願
⑧　太平洋戦争開始

３）移住に関するもの（５）

⑨　出稼ぎ先からの送品（２人）
⑩　生後すぐ神戸へ，小２で帰郷
⑪　４回の転校
⑫　祖母と中国東北部へ移住

４）その他個人的なもの（11）

⑬　スポーツでの活躍（３人）
⑭　やんちゃで，他人をいじめたこと（２人）
⑮　大自然の中でのあそび
⑯　長距離登校
⑰　成績が良かったこと
⑱　よき担任の先生
⑲　小学校の卒業
⑳　火の用心をしたこと

注１）末尾に（３人）（２人）と人数を記したもの以外はすべて１人の思い出である。
２）各人の回答中，主要なもの１項目のみ記入，４名は無記入。

第１－７表　家族や親戚の出郷者

	和泊	知名	計	割合（％）
家族の出郷者	8	6	14	45.2
親戚の出郷者	6	4	10	32.3
出郷者なし	2	5	7	22.6
小　　計	16	15	31	100.0
不　　明	1	1	2	
計	17	16	33	

2．出郷と出郷先での生活

1）出郷の時期

被調査者の出郷の時期は必ずしも1度だけとは限らず，帰郷して再度出郷する場合もあった。そこで2回以上出郷している場合は，主要なものを2回までとりあげて整理した。

結果をみると，1回目では戦前に出郷した者が6割をこえていて，戦後になってからはじめて出郷した者をかなり上回っている（第2－1－a表）。このことは戦時中に出郷した者が多いことを意味する。

次に，この出郷の時点が何歳のときであったかで整理すると，1度目では，10代と20代でほとんどを占めるが，とくに10代が6割を占め，10代が中心であったことがわかる（第2－1－b表）。また，2度目では20代が中心であった。

2）出郷先

兵役を除くと，出郷先は阪神が全体の半分を占め，次いで東京と鹿児島が約14%，沖縄が約11%であった（第2－2表）。また，阪神の中では神戸が72.2%を占め，

第2－1－a表　出郷年

	和　泊		知　名		計		割合（%）	
年	1度目	2度目	1度目	2度目	1度目	2度目	1度目	2度目
1925－29			1		1		3.0	
30－34	1		1		2		6.1	
35－39	2		4		6		18.2	
40－44	7		4		11		33.3	
45－49	2	2			2	2	6.1	28.6
50－54	4	3	2	1	6	4	18.2	57.1
55－59		1	1		1	1	3.0	14.3
60－64	1		2		3		9.1	
65－69			1		1		3.0	
計	17	6	16	1	33	7	100.0	100.0

第2－1－b表　出郷時の年齢

	和　泊		知　名		計		割合（%）	
年齢	1度目	2度目	1度目	2度目	1度目	2度目	1度目	2度目
10－14	5		3		8		24.2	
15－19	7	1	5		12	1	36.4	14.3
20－24	3	2	4		7	2	21.2	28.6
25－29	1	2	3	1	4	3	12.1	42.9
30－34		1				1		14.3
35－39			1		1		3.0	
40－45	1				1		3.0	
計	17	6	16	1	33	7[1)]	100.0	100.0

注1）7人中4人の1度目の出郷は兵役である。

第２－２表　出郷先

	和泊		知名		合計			割合（%）
	1度目	2度目	1度目	2度目	1度目	2度目	計	
阪神	5	3	9	1	14	4	18	50.0
京浜	3		2		5		5	13.9
鹿児島	3		2		5		5	13.9
沖縄	1	2	1		2	2	4	11.1
名瀬	1				1		1	2.8
北九州	1				1		1	2.8
高知		1				1	1	2.8
中国東北部			1		1		1	2.8
小計	14	6	15	1	29	7	36	100.0
兵役	3		1		4		4	
計	17	6	16	1	33	7	40	

第２－３表　出郷時の随伴者

随伴形態	和泊	知名	計	割合（%）
単独で	19	11	30	75.0
妻子と	2	3	5	12.5
兄弟・友人と（進学）	1	2	3	7.5
親と	1	1	2	5.0
計	23	17	40	100.0

注）１度目と２度目をあわせて計算。

大阪の16.7%，西宮と尼崎の5.6%を大きく引離している。

３）出郷時の随伴者

出郷時の状況をより適格に捉えるため，出郷時の随伴者をみると，１人が断然多かったが，家族や友人と共にというケースも合わせて４分の１程あった（第２－３表）。

４）出郷の目的

出郷の目的を尋ねた結果をみると，仕事に関連した目的が半数以上を占めて最も多く，進学や教育に関連した理由がこれに次いでいた。また，兵役のためという理由もこれらに次いで多く，戦時下という時代を反映するものであった（第２－４表）。

５）出郷先での住居探し

出郷先での状況をより具体的に捉えるために，出郷先での住居探しの状況をみた。会社や学校などの世話による場合も21.2%と少なくなかったが，家族や親戚さらには同郷人などのつてに依存する場合が合わせて66.7%で最も多かった（第２－５表）。

６）出郷先での仕事探し

移住当初に直面する問題は，住むところとともに仕事をどうやって探すかである。そこで後者についてみると，家族，親戚，同郷人などに依存した場合が61.2%と最も多く，住居とほぼ同様の傾向であった（第２－６表）。なお，「その他」も32.3%と多かったが，この主な内容は自分で探したというものである。

第２－４表　出郷の目的

目　　的	和泊	知名	計	割合（%）
仕事のため[1]	12	8	20	50.0
仕事の手伝い	1	1	2	5.0
進学	5	4	9	22.5
子供の教育や将来	1	1	2	5.0
親の転居とともに	1	1	2	5.0
兵役	3	2	5	12.5
計	23	17	40	100.0

注１）「夢を追って」，「国のため」というものも，実質的には仕事を通してのことなので「仕事のため」の中に含めた。

第２－５表　出郷先での住居探し

住　居　探　し	和泊	知名	計	割合（%）
家族がいた	3	3	6	18.2
親戚の家	6	7	13	39.4
同郷人の世話	2	1	3	9.1
会社・学校等の世話	4	3	7	21.2
自分でみつけた	1	2	3	9.1
その他	1		1	3.0
計	17	16	33	100.0

第２－６表　出郷先での仕事探し

	和泊	知名	計	割合（%）
家族	4	1	5	16.1
親戚	5	4	9	29.0
同郷人	1	4	5	16.1
学校	1		1	3.2
職安		1	1	3.2
その他[1]	6	4	10	32.3
小　計	17	14	31	100.0
不　明		2	2	
計	17	16	33	

注１）その他の内容は，募集をみて，新聞広告をみて，試験を受けてなど自分で探したものが多く，他に自営業など自分で仕事をはじめたというものもある。

７）仕事の内容

では被調査者は出郷先でどのような職についたのであろうか。この結果を仕事先にほとんど変化がなかった場合と，仕事先に変化があった場合とに分けて考察した。

まず，変化がなかった場合は神戸製鋼，川崎製鉄など大企業[5]の従業者および警察官等の公務員が多かった（第２－７－ａ表）。

第２－７－ａ表　仕事の内容（変化がなかった場合）

仕　事	和泊	知名	計	割合（％）	内　　訳
大企業	4	4	8	44.4	神戸製鋼３，川崎製鉄２，川崎汽船１，明電社１，ダンロップ神戸１
公　務	4	1	5	27.8	警察官２，自衛隊１，防衛施設庁１，教員１
その他	2	3	5	27.8	鉄工所２，船員１，建設会社１，家事１
計	10	8	18	100.0	

第２－７－ｂ表　仕事の内容（変化があった場合）

仕　事　の　変　化	和泊	知名	計	割合（％）
企業従業者→独立して自営	3	3	6	42.9
企業従業者等→大企業従業者	3	2	5[1]	35.7
企業従業者等→公務	1	2	3	21.4
計	7	7[2]	14	100.0

注１）変化先が大企業か否か不明なもの１を含む。
　２）知名町の１人の不明者は除外。

第２－８－ａ表　居住地の移動（移動しなかった場合）

居住地	和泊	知名	計	割合（％）
阪　神	1	8	9	64.3
京　浜	2	1	3	21.4
鹿児島	1		1	7.1
北九州	1		1	7.1
計	5	9	14	100.0

次に，変化があった場合は主要なもの２つのみをとりあげて整理したが，最も多かったものは企業の従事者が独立して自分で仕事を始めたケースであり，次いで，諸々の仕事から大企業の従業者に変ったケースも多かった。もう１つのタイプは企業従事者などから教員等の公務に変わったケースである（第２－７－ｂ表）。

以上を全体としてみると，神戸臨海部の大企業従事者が比較的多かったことが１つの特色として指摘することができよう。もう１つの特色は，一方では警察官や自衛官，他方では教員を内容とする公務関係者が多いことである。

８）居住地の移動

出郷して都会に住んだ者が，さらにその居住地を変える場合も少なくない。こうした居住地の移動状況を把握してみよう。ここでも居住地の移動をしなかった場合と，移動があった場合との２つに分けて考察する。

まず，移動しなかった場合は阪神や京浜へ出郷した者に多くみられる（第２－８－ａ表）。これを全ての出郷先の人数を示した第２－２表と比べると，定着率は京浜が５分の３で60％，阪神が18分の９で50％，鹿児島が５分の１で20％，沖縄が４分の０で０％となり，京浜が最も高く，鹿児島や沖縄は低いという傾向が読みとれる。

第２－８－ｂ表　居住地の移動（移動があった場合）

	最初の居住地				その後の移動先			
	和泊	知名	計	割合（%）	和泊	知名	計	割合（%）
阪　神	3	4	7	38.9	4	1	5	21.7
京　浜	3		3	16.7	7	4	11	47.8
その他	6	2	8[1]	44.4	4	3	7[2]	30.4
計	12	6	18	100.0	15	8	23	100.0

注１）その他の８のうち５は沖縄（他は名瀬，鹿児島，高知）。
　２）このうち水島，半田など川崎製鉄の工場のある都市２を含む。

第２－９表　出郷先での思い出

思い出		和泊	知名	計	割合（%）	内訳
良かったこと	仕事・生活上での活躍	2	5	7	70.0	文学運動，犯人の取調べ，現場監督，組合活動，勤務校の運動部の優勝，ＱＣ運動，南極行き
	楽しかった思い出	2	1	3	30.0	休暇中のスポーツ，東京オリンピック，子供や孫との同居
	小　計	4	6	10	100.0	
苦労したこと	貧　困	6	3	9	50.0	当初の生活苦（４），仕事と夜間高校（２），住居，仕送りと自分の生活費，自立するまでの生活，会社の倒産
	仕事上の苦労	3	1	4	22.2	冷酷非情に徹したこと，生徒指導，多忙
	災　害	1	2	3	16.7	交通事故，店の火事，阪神大震災
	戦　争	1		1	5.6	戦争のこと
	家庭の不幸	1		1	5.6	娘の死
	小　計	12	6	18	100.0	
計		16	12	28[1]		

注１）この他に「思い出なし」が３（和泊１，知名２），不明２（知名２）あり。

言い換えると大都市ほど定着率が高くなっている。

次に，移動が行なわれた場合をみると，全体的には阪神や沖縄から京浜へという傾向が強くみられるが，川崎製鉄社内での移動（神戸から千葉へや，これらから水島，半田などへ）も目立っている（第２－８－ｂ表）。

９）出郷先での出来事や思い出

出郷先であった様々なことを整理した結果をみると，まず苦労したことの方が良かったことよりも多くあげられ，また，苦労の中味は貧困さが最も多かった（第２－９表）。良かった思い出の内容は「仕事上での活躍」としてまとめることができよう。

以上をまとめると，戦前に10代の若者が，主に仕事を求めて単独で，身寄を頼りに阪神方面とくに神戸へ出郷したこと，仕事では神戸臨海部の大企業で働く者が比較的多かったが，のち企業従業者から独立して自分で仕事を始める者もあり，居住地では阪神から京浜方面へ移動する傾向がみられたこと，都会の生活では，初期の頃の貧しさに苦労したが，仕事上での活躍が良き思い出となっていることなどとなろう。

3．帰郷と現在の生活

1）帰郷の時期と年齢

まず，被調査者がいつ帰郷したのかをみると，80年代と90年代前半すなわちここ15年間に集中しており，とくに80年代が比較的多かった（第3－1－a表）。

次に，帰郷時点での被調査者の年齢をみると50代後半から60代で約8割とこれらの年齢であり，この中でも50代後半から60代前半が65.6%ととくに多かった（第3－1－b表）。この結果は定年時とほぼ重なっていると言えよう。

第3－1－a表　帰郷年

年	和泊	知名	計	割合（%）
1945－49		1	1	3.1
1950－54				
55－59				
60－64				
65－69				
70－74				
75－79	1	3	4	12.5
80－84	7	3	10	31.3
85－89	5	4	9	28.1
90－94	3	4	7	21.9
95－	1		1	3.1
小　計	17	15	32	100.0
不　明		1	1	
計	17	16	33	

第3－1－b表　帰郷時の年齢

年　齢	和泊	知名	計	割合（%）
25－29		1	1	3.1
30－34		1	1	3.1
35－39				
40－44				
45－49	1		1	3.1
50－54		2	2	6.3
55－59	5	4	9	28.1
60－64	9	3	12	37.5
65－69	1	3	4	12.5
70－74	1	1	2	6.3
小　計	17	15	32	100.0
不　明		1	1	
計	17	16	33	

2）帰郷直前の居住地

つぎに，どこから帰郷したのか，すなわち帰郷直前の居住地についてみると，京浜が12，阪神が13でほぼ等しく，この両者を合わせると8割近くを占める（第3－2表)。なお，その他の中の半田と水島は川崎製鉄のある町である。

3）帰郷時のつれあい

帰郷の様子をより具体的に捉えるため，誰といっしょに帰郷したかの結果をみると，夫婦の2人でという帰郷形態が6割近くを占め，最も多かった（第3－3表)。また，1人という答の中味も1人暮しであった者は半分にすぎず，残りの半分は様々な事情から，被調査者の帰郷の前か後に妻が帰郷しているというものであって夫婦が健在である。これを夫婦2人で帰郷したタイプと合わせると，約4分の3が夫婦で帰郷したことになる。

4）帰郷の理由

帰郷の理由を整理すると「父母の世話のため」が最も多く，「定年退職したから」と「土地・家・墓などを守り，引き継ぐため」が続いていて，以上で全体の60％近くを占める（第3－4表)。従って，これらが重なった場合に，帰郷への力はより

第3－2表　帰郷直前の居住地

		和泊	知名	計	割合（％）
阪神	神戸	2	1	3	
	尼崎	1	2	3	
	西宮	1	2	3	
	大阪		3	3	
	奈良		1	1	
	小計	4	9	13	40.6
京浜	東京	6	1	7	
	千葉	2		2	
	川崎	1		1	
	横浜		1	1	
	横須賀		1	1	
	小計	9	3	12	37.5
その他	福井	1			
	北九州	1			
	鹿児島	1			
	沖縄	1			
	半田		1		
	岐阜		1		
	水島		1		
	小計	4	3	7	21.9
計		17	15		100.0
不明			1		
総計		17	16	33	

第３－３表　帰郷時の随伴者

随伴形態	和泊	知名	計	割合（%）
1　人	6	4	10[1]	32.3
2　人	9	9	18[2]	58.1
3人以上	1	2	3[3]	9.7
小　計	16	15	31	100.0
不　明	1	1	2	
計	17	16	33	

注１）１人暮しだった者は５人（和泊３，知名２）で，他の５人は妻帯者で，帰郷時が２人でなかったにすぎない。
２）全員妻と２人でである。
３）妻と母，妻と子供２人，複数の子供の３例である。

第３－４表　帰郷の理由

理　由	和泊	知名	計	割合（%）
父母の世話	6	5	11	22.0
定年退職	6	3	9	18.0
土地・家・墓を守り引きつぐ	6	3	9	18.0
健康上の理由[1]	1	4	5	10.0
老後の暮しに備えて[2]	2	2	4	8.0
生れ故郷であり，恋しい	1	2	3	6.0
仕事上の理由[3]		3	3	6.0
家庭内の事情[4]	1	1	2	4.0
もともと帰るつもりだった	1		1	2.0
海洋研究	1		1	2.0
家を建てるため		1	1	2.0
震災にあったため		1	1	2.0
計	25	25	50	100.0

注１）自分か妻の病弱を理由とするもの，また「空気が悪い」もここに含めた。
２）「老後をのんびり暮すため」の他に「老後に備えて，自己退職をした」を含む。
３）「仕事がいやになった」，「国家試験に失敗した」，「終戦直後で職がなかった」の３件。
４）「子供がいなかったので」と「孫が大きくなったので」の２件。

強く働いたであろう。この他では，「身体が弱いため」や「老後の生活は故郷で」などが続いている。

５）現在の仕事

現在，日常的に仕事を行なっている者は必ずしも多くなく，無職が62.5％を占める（第３－５表）。仕事を行なっている者の中では農業が21.9％と最も多く，地方公務員の6.3％などがこれに次いでいる。ただ，「無職」の中には息子や娘の自営業の「手伝い」や，ボランティア的活動をしていて，実質的に働いているのとあまり変らないケースも含まれている。

第3－5表　現在の仕事

仕　事	和泊	知名	計	割合（%）
な　し[1]	11	9	20	62.5
農　業	3	4	7	21.9
地方公務員	1	1	2	6.3
商店経営	1		1	3.1
陶芸教室	1		1	3.1
体育館管理		1	1	3.1
小　計	17	15	32	100.0
不　明		1	1	
計	17	16	33	

注1）息子や娘の手伝いをしているケースや，ボランティア的活動をしているケースも少なくない。

第3－6－a表　郷土生活の長所

長　所	和泊	知名	計	割合（%）
自由・気楽・のんびりできる	6	6	12	25.5
空気・自然・気候が良い	5	6	11	23.4
人情・人づきあいが良い	5	4	9	19.1
畑があり，野菜・花等がつくれる	3	3	6	12.8
年金で生活でき，安定している	5		5	10.6
ふるさと，生れ育った土地	2		2	4.3
磯釣り	1		1	2.1
百合がある	1		1	2.1
計	28	19	47	100.0

注1）1人複数回答の集計結果による。
2）設問は選択ではなく，自由記入による。

6）郷土生活の長短

まず，郷土生活の良い点をみると，「自由で気楽にのんびりと生活ができる」が25.5%「空気・自然・気候（温暖さ）が良い」23.4%，「人情があり，人づきあいが良い」19.1%などが多い（第3－6－a表）。よき自然と人情のある人々にかこまれてのんびりと生活ができるということであろう。この他では「畑があり，花や野菜等が自分でつくれる」や「年金で生活ができ，安定している」などが続いている。

次に，郷土の生活のよくないところをみると，「なし」が最も多かったが，これを除くと，「交際費がかかる」が最も多く，「子・孫・友人と離れている」や「物価が高い」がこれに次いでいた（第3－6－b表）。この2番目と3番目は離島の宿命なのであろうか。また表に見られる様々な指摘もあった。

7）都会生活の長短

まず，都会の良さでは（1）「仕事があり，一定の収入が定期的に得られる」と，（2）「文化・文明生活が経験できる」が最も多く，次いで（3）「遊ぶところや施設

第３－６－ｂ表　郷土生活の短所

短　　所	和泊	知名	計	割合（%）
交際費がかかる	2	3	5	13.9
子・孫・友人と離れている	2	1	3	8.3
物価が高い	2	1	3	8.3
案外，人間関係がむずかしい	2		2	5.6
交通不便		2	2	5.6
台風，夏の暑さ	1	1	2	5.6
生活改善が不十分で，施設が少ない	1	1	2	5.6
刺激が少ない	1		1	2.8
私生活に割り込む	1		1	2.8
若者に島国根性（ひがみ）がある	1		1	2.8
役員を押しつけられる	1		1	2.8
昔より，人間関係がうとい	1		1	2.8
埋めたて等で環境破壊	1		1	2.8
ユリどろぼうがいる	1		1	2.8
収入が少ない		1	1	2.8
人々のマンネリ的姿勢		1	1	2.8
なし	2	6	8	22.2
計	19	17	36	100.0

注）第３－６－ａ表の注と同じ

が充実している」がきており，さらに，(4)「仕事ではりあいのある生活ができる」や「物が豊富で安い」が続く（第３－７－ａ表)。これらのうち（2）と（3）及び（1）と（4）はやや似ており要約すると，仕事があり収入が入るのではりのある生活ができ，また，諸施設も充実しているので「文明生活」が経験できる。物も豊富で安い，となるだろう。

つぎに，都会生活のよくないところをみると，「時間に追われ，ゆとりの気持が持てない」，「物価や地価などが高く，年金だけでは生活が苦しい」，「隣近所のつきあいがなく，息苦しい」，「空気が悪い」などである（第３－７－ｂ表)。強いて要約すれば，隣とのつきあいもなく，時間に追われる生活であり，その上物価も高く，空気もよくないとなろう。

８）家族の分離生活の状況

彼等の帰郷は既にみたように夫婦２人だけがほとんどであり，彼等の子供達は都会で生活を続けている。そこで，彼等の子供達の居住状況について把握した結果をみると，まず，量的には被調査者の約２倍に近い人々が，郷里以外に居住していることがわかる（第３－８表)。次いで，これらの人々の居住地をみると，やはり京浜と阪神に多く，この他では中部にやや多くなっている。

９）郷友会について

最後に，都会に存在した郷友会とのかかわりや，意見を把握し整理した。

まず，被調査者各人の郷友会とのかかわりについてみると，４分の３以上が役員

第３－７－ａ表　都会生活の長所

長　　所	和泊	知名	計	割合（％）
仕事があり，一定の収入が定期的に得られる	4	2	6	18.8
文化生活・文明的生活が経験できる	5	1	6	18.8
遊ぶところや施設が充実	3	2	5	15.6
好きな仕事で，はりあいのある生活ができる	1	2	3	9.4
物が豊富で安い	2	1	3	9.4
旅行がしやすい		2	2	6.3
刺激が多い	1		1	3.1
干渉されない生活	1		1	3.1
良き友人の存在	1		1	3.1
通勤ラッシュで目がさめる	1		1	3.1
交通が便利		1	1	3.1
学校選択の自由がある		1	1	3.1
何事にもチャレンジできる		1	1	3.1
計	19	13	32	100.0

注）第３－６－ａ表の注と同じ

第３－７－ｂ表　都会生活の短所

短　　所	和泊	知名	計	割合（％）
時間におわれ，ゆとりの気持が持てない	3	2	5	21.7
物価や地価が高く，年金生活では苦しい	3	1	4	17.4
隣近所のつきあいがなく息苦しい	2	2	4	17.4
空気が悪い		2	2	8.7
危険性が多い	1		1	4.3
親を郷里においているのが気がかり	1		1	4.3
桜島の降灰	1		1	4.3
酒のさそいが多い	1		1	4.3
昭和30年代は苦しかった	1		1	4.3
子供達に田舎の良さがわからない		1	1	4.3
親戚がいなくてさびしい		1	1	4.3
奄美というだけでバカにされて劣等感		1	1	4.3
計	13	10	23	100.0

注）第３－６－ａ表の注と同じ

であったかまたは会の行事等によく参加した者であり，郷友会とのかかわりが強かったと言うことができよう（第３－９－ａ表）。

つぎに，郷友会に関する思い出についてみると，「はげましあい，心の支えとなる会であった」，「旅行などが楽しかった」，「敬老会や運動会の思い出」などが多かった（第３－９－ｂ表）。親睦を中心とする会の特徴がここには現われていると言えよう。

第３－８表　家族（子供達）との分離状況

子供の居住地	和泊	知名	計	割合（%）
関東（京浜）	16	10	26	42.6
関西（阪神）	8	18	26	42.6
中　　部	3	2	5	8.2
九　　州	1	1	2	3.3
中　　国	1		1	1.6
北　海　道	1		1	1.6
計	30	31	61	100.0

第３－９－ａ表　郷友会とのかかわり

か　か　わ　り	和泊	知名	計	割合（%）
幹事等の役員だった	6	4	10	33.3
よく参加・出席した	6	7	13	43.3
ときどき出席した	1		1	3.3
たまに出席した	1	1	2	6.7
会員だったが，参加せず	2	1	3	10.0
非会員，会にかかわらなかった		1	1	3.3
小　　計	16	14	30	100.0
不　　明	1	2	3	
計	17	16	33	

第３－９－ｂ表　郷友会の思い出

思　　い　　出	和泊	知名	計	割合（%）
はげまし合い，心の支えとなる会だった	2	1	3	23.1
敬老会・運動会		3	3	23.1
旅行などが楽しかった	1	2	3	23.1
島言葉で語り会える楽しみ	1		1	7.7
島から来た人のめんどうをみた	1		1	7.7
若者の参加（集まり）がほしい	1		1	7.7
奄美復帰運動		1	1	7.7
計	6	7	13	100.0

さらに，郷友会に関する意見をみると，「はげまし合う会なので長く発展させてほしい」や「田舎の人の集まりがあった方がよい」など積極的，肯定的な意見が多かったが，他方「今の若い連中はでてこない。関心がなく，このままでは消滅するかも」というような将来への不安を示す意見もあった（第３－９－ｃ表）。

以上を要約すると，帰郷は1980年代以降で55から65才の定年退職後の年齢で，阪神や京浜から，夫婦で帰郷し，農業などをする者もいるが多くは定職は持たず，自然と人情に囲まれて自由で気楽な生活を送っている。帰郷したのは年老いた親がおり，家や土地もあったからというものが多かった。たしかに，都会の生活は，仕事，

第３－９－ｃ表　郷友会に関する意見

意　　見	和泊	知名	計	割合（%）
今の様に発展させてほしい，はげまし合う会なので	4	3	7	31.8
今の若い者は出てこない，関心がない	4	2	6	27.3
田舎の人の集まりはあった方がいい	3	1	4	18.2
現在は２世中心，３・４世も墳墓の地を忘れぬように	1	1	2	9.1
方言を話す場だ，子・孫にも伝えて	1	1	2	9.1
以前は仕事のめんどうなどもみていた	1		1	4.5
計	14	8	22	100.0

収入，諸々の施設が充実していることなど良い面もあるが，時間に追われゆとりがないことなどはマイナス面である。子供たちとは離ればなれの生活となってしまった。郷友会は楽しく，支えとなるものだったが，若者の関心がうすいので今後の心配はある，などとなるだろう。

考　　察

以上の結果に基づき，本章ではいくつかの論点を中心に考察を行ないたい。

1）第１の論点は，定年で退職した場合，都会でそのまま生活を続ける者の方が多いと思われる中で，被調査者たちはなぜ帰郷の方を選んだのかという点である。

この点はアンケートでも直接質問し，その結果も既にみたとおりであるが，１つの特徴は，12種類もの理由があげられていたことに見られるように，答が非常に多様であったことである。つまり，定年退職という時点で，個々人にとって異なる様々な要素にとり囲まれる中で，１つの大きな選択をせまられた問題であったと言えるのではないだろうか。これらの要素の中には，アンケートの答にみられる個人的な要因の他に，日本の住宅事情や社会保障の不十分さなどのことも当然含まれてくるだろう。

しかし，こうした様々な要素の中で，郷里にいる親の世話のためという答が最も多かったことがやはり注目されなければならないと思う。この点は単に量的に多いというだけでなく，ききとり調査の話の中でも強調されていたことの１つであったと感じるからである。

2）論点の第２は，共同体的なまとまりの強さを指摘できるのではないかということである。具体的には，出郷時点での住まいや仕事探しの際に身寄を頼り，実際に世話になっていることが多いこと，また都市部で作られている郷友会に多くの者が参加し，結集していることなどにこのことが示されている。この点については既に論じたこともある[6]ので，ここでは確認し，指摘するだけに留めておきたい。

3）第３の論点は被調査者の人生は，当然のことかも知れないが，彼等が生きた時代を反映したものとなっているということである。すなわち，平均年齢で考えると，彼等の誕生は1926年で，物心がついた頃は戦争の真際中であり，軍国教育を受け，これにつながる将来を展望していた。敗戦からの約８年間は彼等の20代に相当し，アメリカの占領下に置かれたため，本土にすら自由に渡ることができず，働き口を探すとすれば沖縄に行くか本土へ密航するしかなかった。

日本に復帰してからの約20年間は，いわゆる日本経済の高度成長期に当たり，彼等の年齢で言えば30～40代の働き盛りに相当している。すなわち彼等は日本経済の高度成長を担った中心的な世代であったと言えよう。

彼等の50代は，1973年のいわゆるオイルショック以降の「安定成長期」とも言われる時代で，80年代に定年を迎え，間もなく，あるいは数年後に帰郷することになるのである。

以上の中で，その人の人生の方向を決める若い時期に，兵役・軍隊生活を送っているということが，こうした経験をもつ人々が少なくなっている今，強調されてもよいのではないかと思う。この点は，被調査者の世代の特徴として，私達がききとりを行う中で強く感じた点でもある。

4）論点の第4は，第1章の研究目的の部分でも若干提起した日本社会の地域的，空間的な捉え方に関連している。

従来，農山漁村や離島の社会は，それ自体として他と切り離して捉えることが一般的であった。しかしながら本研究でみたように，今日では離島の人々のほとんどが，若い時に都会に出て働くのであり，たしかに，そのまま都会に住みつく者も多いが，定年退職後に帰郷する者も少なくないのである。また，帰郷者の子供達の多くは都会で生活し続けており，帰郷した親との関係は当然ながら強い。

こうした状況をみると都会と離島とを切り離して捉えるのではなく，むしろ両者を一体のものとして考える捉え方が一定の有効性を持っているように思えてくるのである。都会で作られている郷友会の存在も両者の結びつきの強さを反映したものと言えよう。

ところで，こうした考えがなかなか一般化しないのは次のような理由があるからではなかろうか。すなわち，1つは，我々が都市農村関係をみる時，都市の側からしか物をみない傾向があるのではないかということである。郷友会のような現象は都市の側からの視点だけでは捉えにくい現象だからである。

もう1つは，都市農村関係の強さが地域によって異なっているからであろう。奄美や甑島などの離島では，こうした関係が強いが，都会に出ても郷友会などを作らない地域も少なくない。

ともあれ，くり返しになるが，奄美の場合には，島と出郷者の住む都市部との関連が強く，両者を一体と考える捉え方が有効でもあり又必要でもあるように思う。一方のみを見て他方を見ないのでは奄美という地域やその人々の十分な理解はなし得ないと言えよう。

5）第5に，以上の沖永良部島の調査結果を奄美群島全体の中で考えてみたい。最も特徴的な点は，全般的に帰郷者がかなりみられる奄美群島の中でも，沖永良部島は特に多い方の部類に属すると思われることである。この逆は加計呂麻島を含む瀬戸内町や宇検村などの奄美大島南部地域であろう。青年層を中心とした出郷者が同じように多い奄美群島の内部で，帰郷者の方のこの違いは，集落あるいは村としての機能が存続し維持されているか否かによっていると言えよう。大島南部の集落では小・中学校も統合され，青年はもちろん，子供さえ全くいない集落も存在する。それでも，こうした故郷へ帰郷する者が全くいないとは言えないがその人数が少なくなるのは当然であろう。他方，沖永良部島は早くからユリ根や野菜などの商業的農業が確立しており，近年の花卉栽培の伸びなどもあって県下でも農業収入の高い地区となっている。

このほか，共同体的な結合の強さやこれに関連した都市部に居住する出郷者と故郷

に住む人々との結びつきの強さについては，奄美内部で大きな違いがあるようには筆者には思われないが，出郷者の集住地域が神戸を中心としていることは沖永良部出身者の大きな特色と言える。これは，初期の出郷者がたどった歴史的な経過に起因するものであろう。また，この点は上記の共同体的な結びつきの強さが奄美内部でもとくに強いということと関連するのかも知れないが，この点については今後の課題としたい。

6）川間富寛氏の「私の人生」の掲載について

最後に，被調査者の1人である川間富寛氏の手記「私の人生」を，氏の承諾を得て掲載する。この手記は私達の中の1グループが調査のために偶然氏と面会した際，氏から提供されたものであり，私達の調査結果を具体的な例で裏付けるものとして，きわめて有効なものである。いわば，私達の調査の整理が横糸に相当するとすれば，氏の手記はこれを縦糸で補強するものと言うことができよう。なお，掲載に当たり，本文の前に付けられていた兵歴の部分は省略した。また，本文にはなかった小見出しを挿入して，読みやすくした[7]。

私 の 人 生

(1) 入隊・復員・帰島

昭和十五年三月一日，十八歳で志願兵として，鹿児島歩兵第四十五連隊に入隊。同年五月廿一日中支那の漢口に上陸しました。前進前進で激戦に激戦を重ねているうちに，昭和十六年十二月八日太平洋戦争が勃発(ボッパツ)し，南方作戦に参加のため上海に集結しました。昭和十六年十二月廿三日上海より，ソロモン諸島のガダルカナル島に上陸する予定で，上海港を三隻の船団で出帆しました。途中・トラク島に上陸して，二日間の休養の後出帆しました。出港してまもなく二隻の船は敵の魚雷により撃沈(ゲキチン)されましたが，私達の乗っている第三眞誠丸だけは難をのがれました。しばらく航行してから，ガダルカナル島の日本軍の玉砕の情報がはいり，やむなく手前のヴーゲンヴィル島に上陸しました。ここでも飲まず，食わずで激戦又激戦と戦って参りました。その甲斐なく，昭和廿年八月十五日残念ながら終戦となりました。昭和廿二年二月十八日浦賀に上陸復員となりました。その時は，栄養失調のため，国立横須賀病院に入院することになりました。それから一ヶ月後鹿児島陸軍病院に転送となり，昭和廿二年四月退院することができました。退院はしたけど，栄養不良のため就職もできず困っていましたら，炭鉱は人手不足で困っているとのことを聞いたので，早速佐賀のイトコの西村米一さんをたずねて行きました。幸いにして，新屋敷炭鉱に就職ができ，天にあがる思いでした。昭和廿二年十二月帰島することができ，待ちこがれていた沖永良部島に着き，なつかしい我が家に帰り，七年振りに親姉弟と会うことができました。昭和廿三年三月弟一起の紹介でアツ子と結婚し，同年十月分家して農業に従事しました。

(2) 出郷一高知へ

その後夫婦で一生懸命頑張ったおかげで立派な作物を作り，喜んで収穫を待って

いた矢先，昭和廿四年七月の台風で，一夜にして，農作物は全滅の破目にあいました。二人共途方に暮れていたところ，お母がきて，この際二人は内地にでて月給取りにでもなって，アツ子を幸福にしてあげたらとの母の同情をいただき，内地に行くことにしました。先ず高知の兄前富を頼りにして行こうということになり，小さな魚舟で命がけの密航の旅につきました。どうやら一週間で鹿児島に着きようやく妻のお父さんお母さんに挨拶することができました。三日後高知に向い出発しました。

未知の世界に希望をいだき，胸をわくわくさせながら着いたところ，山合の小さな村で，働く所もなく，よそ者にはとても生活できる状態ではありませんでした。取あえず兄の知人の春子姉さんの鶏小屋(ニワトリ)に筵(ムシロ)を敷いて寝泊りをして，食事は，兄の知人の野口精米所より，家畜の飼料のフスマを頂き，再度フルイにかけた粉でパンを造り，川芹(セリ)をつみ取り，動物性蛋白質は，螺(タニシ)をとり，どうやら命をつないでしのんでいました。将来のことを思うと心細くなって，どうしようかと思案にくれていたところ，失業対策の仕事の川堀り作業ができ就職することができました。少し余裕ができたので，考えたところ，妻が昔の女学校卒業の学歴をもっているので，私も負けてたまるかと思い，心に鞭(ムチ)打って，昭和廿五年四月高知県立中村高等学校普通二部に入学しました。廿六才でした。入学はしたけれど，毎日の生活も苦しいのに，学費までださなければならなくなり，どう考えても現状では，生活していけそうもないので，思い切って都会に出ようと覚悟をしました。

(3) 神戸へ

幸いにして兄の知人で矢野隆三という人が，神戸の川崎造船所に務めていることを知りました。早速その人を頼りに，神戸に行くことにしました。それで先ず妻の実家の鹿児島に帰り，両親に相談したところ反対され，鹿児島で職を探して見たらとの事でした。私は失業対策の仕事をしながら鶴丸高校の夜間に通学し，妻はアメ売りの行商をして一生懸命頑張りました。しかし定職はみつからず，とても生活して行けそうもないので，妻の両親に再度お願いしたらようやく聞いて下さいました。とりあえず，私一人先に神戸に行くことになり，神戸市長田区前原町のイトコの川間アキ姉さんの所で下宿することになりました。とりあえず，屑鉄拾いをしながら，神戸市立大和田工業高等学校機械科に転入して通学しました。

しばらくして，川崎造船所の募集があり，昭和廿六年六月，念願がかなって入社することができました。それから毎日が楽しくなり，仕事も勉強も真面目に一生懸命頑張りました。そのうち会社の寮にも入居することができ，又学校も卒業することができました。昭和廿八年に，ある程度の余裕ができたので，後継者が欲しくなり，弟の一起に相談したら，次女のしげ子を養子にやっても良いとのことになりました。早速妻を帰島させ連れてきてもらいました。そのうちしげ子が寮の子供にいじめられ毎日泣いてくるので，子供の教育のため良くないと思い，自分の家が欲しくなり，色々と考えた結果，西明石に自分の家を求めることができました。わが家に落ち付いたところ，娘の将来を考えるようになりました。女の子だから，音楽学校が良いだろうということになりました。ところが，西明石から大阪の音楽学校までの通学は無理ということがわかりました。又私も男一匹自営業をしてみたいと思っていましたので，考えたところ，東京で佳俊がスプリング会社を経営していたので，

相談したら手傳いにきてくれとのことでした。昭和四十年二月川崎重工を退職して，東京に行くことにしました。

(4) 東京へ―そして事業の独立

昭和四十年四月東京に行き佳俊の手傳いをして，営業をしたり，工場の手傳いをしたりして，一生懸命勉強をしました。しげ子も国立音楽高校に入学することができました。将来の音楽大学入学のことを考えると，現状ではやっていけないことがわかりました。それから三年後独立を思いたち，家族に相談したところ協力するということになりました。もし事業に失敗しても，親子三人だったら，橋の下に暮らしてもかまわないということになりました。昭和四十三年十月独立をするようになりました。さて独立はすることになりましたが，かんじんな事業資金は手元に一円もなく，どうしようかと考えたあげく，分家した時に七反位の田畑をもらっていたので，お母さんに，資金造りに売らせて下さいと，お願いしたところ，先祖に申し分けないから田畑は一切れたりとも売ることはできない，貴方達が帰島するまで保管して置くとのことでした。そこで私も腹を決め，男一匹ゼロからやってみようと覚悟をきめ，昭和四十三年十月国分寺の自宅の近くに工場を借り，川間スプリング製作所を設立しました。幸いにして，補聴器メーカーでは日本一のリオン株式会社の仕事が頂けるようになり，百万人の味方を得た気分になりました。

(5) 事業の成功と発展

それからというものは朝の三時から夜の八時まで，一心不乱に働きました。そのかいあって事業も軌道にのりましたので，分家した時，親からもらった財産のことについて家族に相談しました。親からもらった財産があると，私達のゼロからやろうとする精神に反し，邪魔になり，事業にも差しつかえると思いますので，此の際思いきって，本家の母親を見ている弟の一起に，差し上げようということに家族みんなが賛成してくれました。田畑を全部一起に差し上げ，登記料まで送ってあげました。それから非常に気構えも良くなり，昭和四十八年四月廿九日，事業拡張のため，武蔵村山市に大きな工場を借り，四回目の自宅も建築しました。そのうち娘も国立音楽大学を卒業することができ，ドイツのホホシューレイ音楽大学に留学することになりました。会社も昭和四九年四月一日株式会社川間スプリング製作所に社名を登記しました。

それからは，尚一層一生懸命に頑張ったお陰でリオン株式会社の下請三百十八社の中で，一番の成績を修めることができ，表彰されました。その後も五回表彰を受けることができました。私も天に昇る勢(イキオイ)で頑張りました。昭和五三年に五回目の自宅を最後の家として，身に余る位，立派な物を新築しました。

(6) 帰郷

そのうち娘もドイツの留学を無事卒業して，良旦那と結婚することができ，孫も女，男，女と三人でき，まさに我が家の春と，毎日毎日を楽しく暮らしていたところに，昭和五十九年一月に，突然妻が言いました。島のお母さんが，もう九十才になったから，親の生きているうちに島に帰って，親孝行をしたほうが良いと思いま

すがいかがでしょうか。毎月小使を送るよりもお母さんのそばにいて，お母さんを安心させたほうが，一番大事なことと思います，と言われたので，私はビックリして唖然(アゼン)となりました。私は後十年は働くつもりで張り切っていたので，困ってしまいました。その後冷静になって考えてみたところ，母親が私達姉弟を育てるために大変な苦労をしたことも知っており，又毎日母の言うには，人間は，うそは絶対についてはいけない，又何事も真面目にやることと教え込まれたお陰で，この年になるまで，何の失敗もなく無事に過ごさせて頂いたことに感謝し，又年金も二人の生活には充分あることがわかりました。帰島することになったら，親孝行をしながら世のため，人のため尽し，余生を楽しく暮したほうが良いと思いましたので，昭和五十九年八月会社を解散登記しました。昭和五十九年十一月帰島することができました。今冷静に考えてみると，私達夫婦がここまで出来たことは，分家時，もらった財産を，全部本家に返して裸一貫でゼロから，一生懸命に真面目に頑張ったお陰と思い，深く深く感謝している次第です。

謝　辞

本研究を進めるに当り，鹿児島大学の島田俊秀教授，和泊町教育委員会の永吉敏人氏および知名町教育委員会の上村健仁氏をはじめとした両町の役場，教育委員会の方々には大変お世話になった。また，アンケート調査に際しては帰郷者の多くの方々の暖い御協力を得た。とくに，「私の人生」の提供をし，その掲載を心良く許可して下さった川間富寛氏の御好意は大変有難かった。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

注

1) 役場では退職Uターン者と呼んでいた。この方が一般にわかりやすいので，実際のききとり調査の際には我々もこの言葉を使用した。
2) 上田のり子，佐伯美和，迫田真理子，戸高陽子，福島美穂，星野恵理，星原由佳，森晴香の８名である。
3) 24日予定していた船が台風のため24時間出航延期となり，この間にも若干の補足調査を行うことができた。
4) なお，脱稿後１通の調査票の返送があったが，本稿に含めることはできなかった。
5) 従業員1000人以上の企業。
6) 例えば，田島（1990）。
7) なお，明らかな誤字・脱字等については筆者の判断で訂正した部分もある。

文　献

田島康弘　1990．奄美出身者のアメリカ移住．南太平洋研究，10：287-303．

（Accepted January 15, 1996）